

帰りなん，いざ豊穡の大地と海に

——平和なエコ・エコノミーの創造——

藤 岡 惇

「帰りなん，いざ 田園まさに蕪（あ）れなんとす
なんぞ帰らざる」 (陶 淵明「帰去来の辞」)

1. 「自然のミレニアム」にむけて

「……近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於いて論じたい。世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない。自我の意識は個人から集団・社会・宇宙と次第に進化する。……正しく強く生きるとは、銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくことである。」

(宮沢賢治『農民芸術概論綱要』)

キリスト誕生から最初の千年紀（ミレニアム）の間、とくに欧州では人間の生命と能力とは、全能の人格神に帰属しているとみなされていました。人間は、いわば外部の全能者にかしづく下僕となりましたので、「神のミレニアム」といってよい千年間でした。

第2のミレニアムに入ると、「神の専制」への反発から人間復興運動がおこり、しだいに人間が神にとってかわるようになりました。人間は自らを自然環境の外におき、自然を支配と征服の対象だと考えるようになったのです。こうして第2の千年紀は、しだいに「人間のミレニアム」という色彩を濃くしていきました。自己（自分の脳）を中心として、世界が回っているという観念的な天動説のような考えに染まるようにもなりました。その結果は、自我のエゴ化

と精神病理の蔓延、核戦争、地球環境の危機でした。

第3のミレニアムの課題とは何でしょうか。あらゆるイノチ（生命）が輝かないかぎりは人間のイノチも輝けない世紀、「万物の霊長」にふさわしく、地球環境全体をケアする義務を人間が引き受ける世紀になることだと、私は考えています。ジョン・レノンは、『イマジン』という歌を作曲し、「想像してごらん。神様なんていないってことを。そして皆が平和に暮らしていることを」と歌いましたが、「神のミレニアム」と「人間のミレニアム」双方の弱点を補正した「自然のミレニアム」への転換が望まれているのです。

そのための「自然体の経済」をどう創ったらよいのでしょうか。次の4つの問題を解決していくことだと思います。

第1に、環境破壊による人類の緩慢な大量死を避けることです。今日の人類は、二酸化炭素を炭素換算で年間72億トン排出していますが、そのうち、森林や海洋など自然が吸収してくれるのは31億トン程度。残る41億トンは大気中に滞留し、温暖化を促進しています。気候を安定させようとする、年間排出量を30億トン以下に下げなければなりません。2050年までに排出量を半分にすることが最低限の責務となるでしょう。ただし過去百年の間に大量の二酸化炭素を排出してきた先進国が、まず率先して排出量の1/3化を達成し、発展途上国を排出量の大幅減にいざなっていくほかないでしょう。

ただし発展途上世界の絶対的な貧困と人口増を考えると、地球上で生み出す富の総量については、2倍程度に増やす必要があるでしょう。二酸化炭素の排出量を半分にしながら富の生産量を2倍にするには、化石エネルギーあたりの富の生産性を4倍に引き上げる必要があります。先進国のばあい、より高い目標——化石エネルギーあたりの生産性のほうを6-8倍に引き上げるという目標を掲げ、率先して挑戦していくことが求められます。労働の生産性の安易な上昇は大量の失業者を生み出すだけ。「人間を失業させるのではなく、エネルギーのほうを失業させる」エコ産業革命が実現できるかどうかにかんして人類の未来がかかっているのです。そのためには、大量のエネルギーが必要な「モノ」の生産を減らし、エネルギーを余り使わずに生産できる「サービス財」の比率を高

めていくことも大切となるでしょう。モノの豊かさの追求はほどほどにして、コト（関係）の豊かさ、ヒトの豊かさ、自然界のイノチの豊かさ、働きがいや自由時間の豊かさの方を追求する。「おいしいモノを食べたい」から「おいしいモノを食べたい」への転換です。

第2に、無差別のテロ、これにたいする国家テロや戦争の応酬といった、憎悪と暴力の悪循環を何としても避けるという課題です。日本海沿岸だけですでに70基を超える原子力発電所が操業しています。チェルノブイリ級を凌駕する超大型の原発が多いのが特徴です。もし米国軍と北朝鮮軍とが戦端を開けば、超大型原発の炎上は避けられないし、すさまじい破局となることは明らかでしょう。人類が戦争を絶滅しないかぎり、戦争のほうが人類を絶滅させてしまう——そんな時代が、なお続いています。

第3に、国境を越えたマネーの暴走が貧富の格差を拡大し、「百年に一度」という金融恐慌を引き起こしつつありますが、これにどうストップをかけるかという問題です。マネー移動のグローバル化のなかで、労働・人権・環境基準の最底辺への切り下げ競争が激化し、世界では労働人口の1/3にあたる10億人が失業ないし半失業状態になっています²⁾。日本でも、生活への不安が消費不況を激しくし、新たな紛争の火種となっています。若者や失業者に働きがいのある仕事を保障したり、市民としての尊厳を保障する生存保障制度を整えないかぎり、消費不足におちいり、デフレ不況の解決は難しいでしょう。

第4に、家族や地域社会の絆が解体し、日本は「無縁社会」となりつつありますが、家族や地域社会の絆をどう結びなおしたらよいかという問題です。じっさい独居老人が増え、親しい人に看取られることなく死んでいく人が年間10万人、引き取り手のない遺体についていえば、年間3万2千人に達しています。他面では、少子化と教育の市場化が進み、社会関係を取り結ぶのが苦手な若者、精神を患う人、自殺・自傷に走る人、閉じこもりやストーカーが増えていきます³⁾。個の尊厳を前提にしたうえで、脳を体に埋め戻し、心身を地域の文化とエコロジー（生態系）の秩序に埋めこみ、根付かせたうえで、家父長制的抑圧とは無縁な家族と地域社会を再建していくには、どうしたらよいのでしょうか

か。

以上の4つの課題をトータルに、整合性をもって解決していくには、どうしたらよいのか——このことを世界中の人々が考えています。ただし人間とは弱い者。貧しい社会になるほど、道徳の説教だけでは世の中は変わりません。「そうしたほうが得する」というしくみ、いわば「徳が得になるような経済システム」を形成することが必要なのです。経済学の役割は重大ですね。まずは、そもそも「経済」とは何であり、どうしてこのような問題が生まれてきたのかを考えてみたいと思います。

2. 自然のなかから社会が生まれた

「…私たちが、[万物の靈長たるにふさわしい] 雅量をもつようになるとき、…私たちには…『高貴な身分には義務が伴う』ことを片時も忘れない者のもつ威厳が回復されるでしょう。」

(E・F・シューマーハー 『スモール イズ ビューティフル』)

宇宙の創生と進化

話は、137億年前のビッグバンの直後にとびます。当時の宇宙には、もっとも単純な元素—水素とヘリウムしか形成されていませんでした。核融合を起こして、より複雑な元素をつくりだすためには、大変な高熱がいるからです。約38万年後の「宇宙の晴れ上がり」をへて、ビッグバンから3億年がたった頃に、最初の天体—原始星や原始銀河が生まれてきたといわれます。突然に、それぞれの原始星の原子（核融合）炉が点火し、天空の闇を照らしました。そして核融合反応のおかげで、炭素・シリコン（珪素）・鉄といった重い元素が原始星の中心部で生み出されるようになります。

数百万年後には、第一世代の星は寿命を終え、様々な元素を宇宙空間に放出し、もっと重くてコンパクトな第二世代の星たちを生み出す材料を提供します。第二世代の星の寿命は長くなりますが、最後を飾る超新星爆発がおこるように

なりますと、数億度に達する高熱が発生します。そのおかげで元素間の核融合反応が一挙に進み、複雑な原子核をもつ銅や金・銀が生み出されました。とくに銀河と銀河とが衝突し、交錯した際には、星の形成が急激に進みました。超新星爆発も頻発しますので、金属性元素の形成に拍車がかかりました。超新星爆発直後の周辺空間に現れる元素の成分比は、人体を形づくる元素の成分比とほぼ同じ。爆発直後の周辺空間の元素を集め、収縮させていくと人体ができるそうです。⁴⁾ 不思議だと思いませんか。

このようなかたちで幾度となく繰り返される「宇宙の陣痛」のなかから、原子の結合体たる分子が生まれ、そしてその土台のうえに分子の有機的結合体（有機物質）が生まれてきました。そして地球の深海のなかで、36億年近くまえに最初の生命体（イノチ）が生まれたといいます。原始の海の「生命スープ」の成分は、人間の胎児が浮かぶ母体の羊水の成分とほぼ同じというのも、不思議な符合です。

さて生命誕生後の26億年の間は、細胞分裂というかたちでの無性生殖が、生命の繁殖の唯一の方法でした。そこでは個体の死はありません。雄と雌とが互いのDNA（遺伝子コード）を交じり合わせ、子を生み出すという有性生殖がはじまって、個体の死が始まりました。高等生物たちは、セックスの喜びを味わう代償として、死の恐怖を味わうようになったのです。⁵⁾

絶妙な生命維持装置を備えた「いのちの惑星」

地球の表面を大気がおおっていますが、雲が生まれ、生物が生息する対流圏というのは地表から11キロメートル程度の厚みしかありません。地球を「りんご」にたとえますと、対流圏というのは、りんごの表皮よりもずっと薄い存在なのです。⁶⁾

地球上の原始大気というのは、ほとんどが二酸化炭素からなっていたそうです。気温は今よりはるかに高く、太陽からは有害な紫外線が容赦なくふりそそぐ苛烈な世界でした。ちょうど今の金星のような世界だったのです。陸地の上に土はあっても、土中の微生物はゼロという荒涼とした世界。イノチが発生し

た後も、初期の段階ではイノチは、紫外線の届かない深い海のなかでしか生きられなかったのは、そのためです。

とはいえ海中植物の活発な光合成作用のおかげで、海に吸収された二酸化炭素は炭素と酸素に分解され、炭素は石灰岩となって海底に沈みこみ、酸素を大気中に放出します。大気中の酸素濃度が高まると、酸素の一部は紫外線と反応してオゾン (O₃) となり、地上15キロから50キロメートルのところにオゾン層を形成していきます。太陽からやってくる有害な紫外線をオゾン層のところでシャットアウトするしくみが生まれてきたのです。こうして生物が陸に上っても生きられる環境が整いました。陸上でも光合成作用が進むようになると、大気中の二酸化炭素濃度はいっそう低下し、気温も下がります。それにつれて地上でも植物の繁茂が進み、光合成作用が促進され、二酸化炭素濃度はついに0.04%まで下がり、酸素濃度21%という生物にとって理想的な環境が作り出されました。深い海、光合成、酸素、オゾン層という絶妙な生命維持装置に支えられることで、「イノチの惑星＝緑なす地球」が奇跡的に生み出され、維持されてきたわけです。

イノチの尊厳，人間の尊厳

それはともかく、有性生殖の積み重ねのなかで、子供に引き継がれる DNA は高度で複雑なものになり、その精華として人類が誕生します。生物の進化の歩みを手で表したばあい、その最先端の指先のところに、「自然がついに自分自身の意識にまで到達している存在」を生み出したのです。一人の人間のなかに60兆の細胞がすばらしい協同の活動をして、人間活動を支えています。よく生物学者は、「人間とは36億年のDNAだ」と述べますが、⁷⁾一人のなかに含まれるDNAの総延長は、1080億キロ——地球と太陽を360回往復する長さになるといいます。⁸⁾ビッグバン直後の状態から、宇宙の物質系は、ここまで進化をとげたのです。

たしかにヒトとは、自然の一部、「多少コントロールが効く自然」にすぎません。胎児のときや植物人間になったばあい、脳がコントロールできる肉体部

分はわずかです。成人期になっても、脳の指示どおりに動く筋肉は表面筋に限られ、心臓や内臓器官まで動かすことはできません。とはいえヒトは、身体・社会・自然を認識し、より美しい姿に変える能力と可能性をもった存在でもあります。

イノチはなぜ尊いのでしょうか。わけてもヒトのイノチは、なぜ尊いのでしょうか。60兆の細胞が、1千億キロ余のDNAに導かれて、自らの力で宇宙の最高の精華としての光を発しているからではないのでしょうか。137億年の歳月をかけて、宇宙自身が幾度とない陣痛の苦しみに耐え、腹を痛めて、ついに自らの姿を捉える眼と耳をつくりだした——まさにその眼や耳にあたる部分が、私たちだからではないでしょうか。⁹⁾

指先を切り落とす際には、痛いという感覚が生まれますね。戦争とは人指し指と中指とが争い、傷つけあっているようなもの。たとえ敵兵であっても心が通い合った瞬間、殺すことができなくなります。戦場に駆り出された現代の若者が、敵を殺そうとしても殺すことができない羽目に陥り、精神病に追い込まれていくのは、そのためなのです。

3. 社会のなかから市場経済が生まれた

「経済のない道徳は寝言である

しかし道徳のない経済は犯罪である」(二宮尊徳)¹⁰⁾

自然からの社会の枝分かれ

およそ200-370万年前頃に、私たちの祖先（アファール猿人など）は、生活の拠点を樹上から草原に移し、直立歩行を本格化させました。直立歩行のおかげで手と足との機能を分けることができ、手を操った複雑な仕事ができるようになりましたし、脳が重くなっても、背骨で支えることもできました。おかげで200万年前から130万年前までの70万年の間に、脳の大きさは一挙に2・5倍に増加し、知的な活動の発展を支えてくれたわけです。

ただし直立歩行は、メスの出産と子育て（次世代の再生産）に新たな困難を作り出すことにもなりました。重力の作用をうけて、胎児は子宮から膣を通過して未熟児のまま誕生するようになったからです。この困難に対処するために、メスが採用したのは、ボノボ（ピグミー・チンパンジー）と同様の「ラブ&ピース戦略」でした。つまり発情期以外の時期でも性交ができるように体を変化させ、子供が自立するまでは、オスと安定的な生殖・子育て共同体（家族関係）を取り結ぶという戦略でした。私たちの祖先は、樹上から草原に活動の場を移しても、猛獣の餌食とならずにすむような社会的な自衛のしくみを作っただけでなく、未熟児の子育てを担う情愛に満ちた家族関係も作りだしたわけですから。つまり200万年ほど前に私たちの父祖は、家族や社会を形成することによって、自然界の猛威から生き残ろうとする選択を行い、ここに自然界から人間社会が枝分かれする歩みが始まったのです¹¹⁾。それとともに自らの土台である自然を自ら（＝脳）の外部に位置する「環境」だと誤認する時代の幕が開きます。

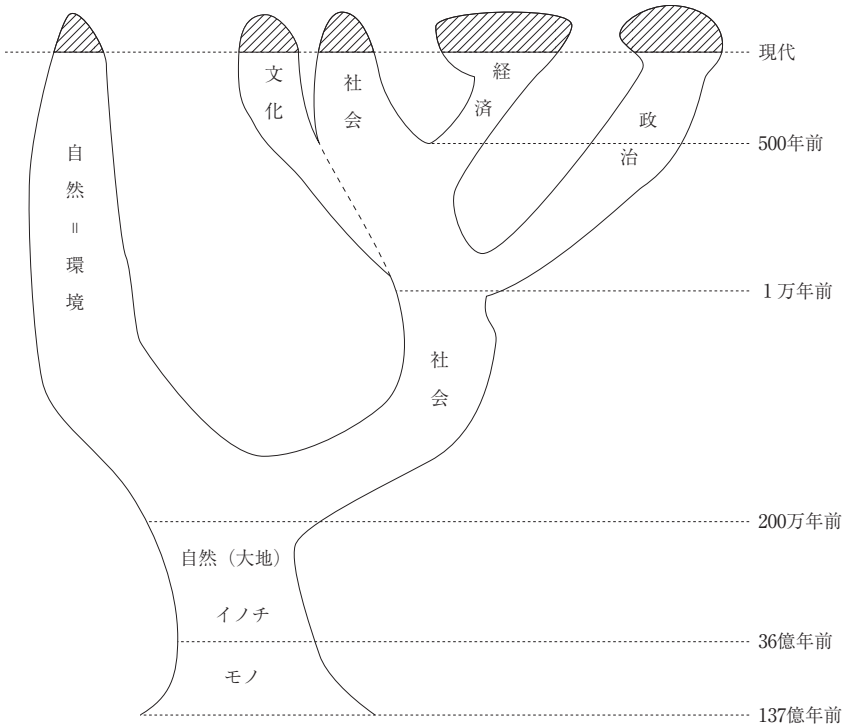
20万年前に現生人類が現れますと、大きな飛躍の時期が始まります。アイデアを交換し、新しいアイデアを生み出す時代、人間活動の知的なエネルギーが格段に発展する時代が始まり、このパワーを背景として、現生人類はアフリカ大陸を離れて、他の地域に拡散していきま¹²⁾した。

社会からの政治・文化・経済の枝分かれ

ただし200万年前から1万年前までは、自然から社会が枝分かれしたとはいえ、モノづくりも、ヒト（後継者）づくりも、コト（政治）づくりの活動も、より良い生き方を求めて神と交信する文化の活動も、社会活動全般のなかに渾然一体となって溶け込んでいる時代でした。

1万年ほど前の農業＝定住革命をきっかけとして、社会からの最初の大分裂が発生し、職業的な兵士と官僚が生まれ、政治—コトづくりの世界が枝分かれしていきま¹²⁾した。国家が生まれ、戦争という組織的な殺戮戦が始まった時期と重なります。ほぼ同時期に、文化活動の一部を専門的知識人（文化人）たちが担うようになり、社会から枝分かれする動きも始まります。

図-1 人間社会の系統樹

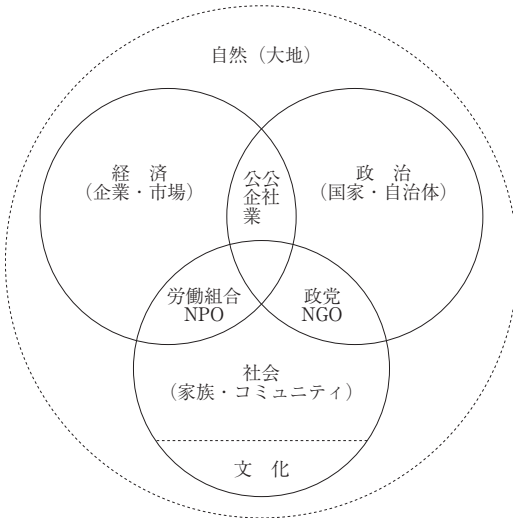


500年ほど前に、社会からの第3の枝分かれが発生し、「モノづくりと分配」（経済）の領域が自立して、「市場経済」という独自の論理で動くようになります。

政治（国家）、文化（僧院・工房・学校）と経済（企業・市場）とが枝分かれした後の「社会」には、消費（人づくり）と睡眠・余暇の活動しか残っていません。マネーを稼げない「影のような仕事」の場に、社会は変質し、格下げされ、家事の仕事とヒトのケア（老親の介護や子供の世話）は、もっぱら女性が担当するようになりました。

このような枝分かれのプロセスを示したのが、図-1の人間社会の系統樹です。自然・社会・経済・政治・文化というファクターは共通した根をもってい

図-2 人間活動の4領域の相関
 ——図-1を上から見たばあい——



るにもかかわらず、現代では相互に無関係なファクターであるかのように分立しあっていることがわかります。大学のなかで勢力争いをしている学部間の関係とそっくりですね。

自然・経済・政治・社会・文化とは何か

これまで人間社会を歴史の流れのなかで見してきましたが、図-1の歴史的な系統樹の到達点を上から眺めて

みましょう。そうすると現代人の24時間の生活は、「経済」、「政治」、「社会」、「文化」という4つの領域から構成され、生活の土台には、「自然」(大地)が位置していることがわかります(図-2参照)。

「自然」(大地)とは、万物を進化させ、イノチを生み出す場のことです。ヒトというのは、葉っぱ一枚・細菌一つ、自分の力で生み出すことはできません。できることは自然進化の産物であるイノチを加工するくらいのこと。下手に手を加えると、狂牛病や花粉症、氷河の融解などを招きますので、慎重な対処が求められているのはご存知のとおりです。

「経済」とは、モノを生み出し、分配する場です。現代では、市場と企業が主な担い手となり、もうけ追求原理が支配しています。

「政治」とは、モノ・ヒトの管理・防衛のために、コト(関係・ルール)を生み出し、調整する場です。政府や自治体が担い手となり、公共性の原理にもとづく運営が求められています。

「経済」、および「政治」(とくに軍事)という領域は、凶暴な自然や敵兵をあ

いてとして、がぶりと組み合った真剣勝負の世界。相手の動きにあわせてこちらの動きも決まってくるという意味で、「必然性」が貫きやすい世界です。その証拠にどの民族も、農具・運搬手段や武器については、似かよったものしか生み出せていません。真剣勝負の世界では、「遊び」や「空想」といった観念の自由な展開を許すゆとりがないからです。経済や軍事の領域の人間行動は予測が付きやすい。ヒトを自由意思のない「モノ」であるかのように扱い、微分・積分の方程式で表示しても、大過ないことが多いのはそのためです。

これにたいして、政治と経済とが枝分かれした後の「社会」というのは、モノの消費を介してヒトを生み出し、社会の後継者を育てる場に縮小してしまいました。この領域は、「ヒトのイノチを生み出す」女性の「天職」の場とされ、女性は、家庭内に閉じ込められ、日の当たらない「シャドーワーク」を強いられてきました。しかし真剣勝負の仕事が終わった後のモノの享受＝消費の場であることから、「遊びの余地」が大きく、民族ごとに多様・多彩な活動を展開して来ました。ヒトの社会・文化活動を数式で表現したり、予測したりするのが難しいのは、そのためです。

真剣勝負の終わった時間帯にヒトは、己の人生体験を反省し、より良い生き方を探求し、その成果を表現し、同胞と交流してきました。この営みのことを「文化」と呼んでいます。「神のミレニアム」の時代には、文化活動とは、より良い生き方を探求・表現し、これを神に奉納し、神の啓示を仰ぐ営みであったといっても過言ではありませんでした。「人間のミレニアム」に移るとともに、文化の世俗化・専門化が進み、「社会」領域からの枝分かれが、いっそう促進されました。元来は外界を観察・理解し、教訓を得るという同質の行為であったものが、生活を科学化するための営みは学問に、生活を芸術化するための営みは文化・芸術に、生活を倫理化するための営みは宗教・道徳というように、分化していったのです。

以上をまとめますと、「自然」とは万物のイノチづくりの場、「経済」とはモノづくり（と分配）の場、「政治」とはコトづくりの場、「社会」とはヒトづくりの場、「文化」とはヒトの生き方（志・目標）づくりの場だと定義することが

できます。

異なる価値の追求

フランス革命の際に、フランス人たちは、革命を導く3つの価値として、「自由・平等・友愛」を強調しました。経済とは「自由」原理の支配する世界、政治とは「平等」原理の支配する世界、社会（枝分かれ後）は、「友愛」（無償のボランティア）原理が支配する世界になるべきだと考えられたのです。そのように考えると、文化は「真善美」原理の支配する世界、自然（大地）は「多様性」原理が支配する世界になるべきなのでしょう。19世紀が三色旗の時代だったとすれば、21世紀は「自由・平等・友愛・美・多様性」の五色旗の時代となるのかもしれませんが。

領域が異なれば、追求すべき価値もまた変わってきます。友愛原理が支配すべき「社会」領域に自由な利得追求という経済界の原理がもちこまれますと、出生率が低下したり、子どもが健やかに成長できない、後継者が育たないといった不都合が生まれます。政治の世界を経済の原理で引きまわすと、利権と汚職がはびこり、機能不全に陥ることでしょう。

人間活動を一台の自動車にたとえてみましょう。「経済」はエンジン、「政治」はハンドル、「社会」はブレーキ、「文化」はミラーやカーナビ装置にあたります。さしずめ「自然」（大地）は自動車を走らせる道路だといってよいでしょう。エンジン部分（狭い経済の領域）だけに視野を局限していると、自動車の全体的な姿も道路も見えなくなります。乗客たちの団結をはかるために自動車の目的地をどこに定めたらよいのかといった問題、走行中の自動車に不具合が生じた場合、どこを調べ、どこを修繕したらよいのかといった問題はエンジン部門の専門家の手に余ります。他方では、経済以外の4つのファクター（政治・社会・文化・自然）との関連において考えないことには、エンジン部門の改良は、できない相談となります。

歴史発展の法則的把握のかぎ——生産力と生産関係

「経済」という領域は、凶暴な自然をあいてとして、がぶりと組み合った真剣勝負の世界であり、「必然性」が貫きやすい世界だということはすでに述べました。自然を改造する力のことを「生産力」と呼びます。自然の猛威のなかで生き延び、生産力を少しでも高めるために、ヒトは生産のための社会関係（生産関係）を必死になって変えてきました。

社会の変容を法則的にとらえるには、生産力と生産関係を軸に考察するのがよいとして、科学的社会主義の祖たるカール・マルクスはこう書いています。

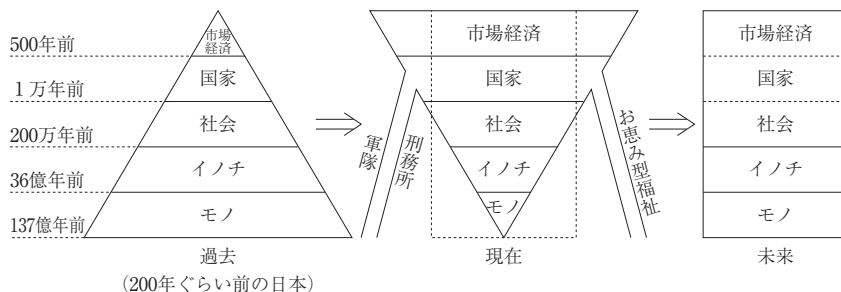
「人間は、彼らの生活の社会的生産において、……彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係に入り込む。……社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、……既存の生産諸関係と……矛盾するようになる。……そのときに社会革命の時期が始まる。経済的基礎が変化するにつれて、巨大な上部構造の全体が徐々に、あるいは急激にくつがえる¹³⁾」と。歴史変化をひきおこす原動力（エンジン部門）というのは、やはり生産力の増強を求める経済活動にあることは間違いありません。

5つの領域の相互関係におこった歴史的变化

人類の歴史のなかで、自然（モノ・イノチ）、社会、文化、政治、市場経済という5つの領域相互の比重関係にどのような変化が生まれてきたかを図示したのが、図-3です。図のなかの左側の正三角形は、西欧では数百年前、日本に即していうと200年前の江戸時代末期の頃の5領域の比重関係を示し、中央部の逆三角形は、現時点における5領域の比重関係を示しています。

この図が示すように近代資本主義の発展とともに、パワーと資源とは、自然から社会へ、そして経済へとどんどん吸い上げられ、正三角形の形をしていた人間社会の位置関係が、逆三角形の形に変容していきました。このような逆三角形の形は、不安定であり、どうしてもグラグラしやすい。そこで国家による安定装置——軍隊と刑務所、および自尊心・自立心を損なう「お恵み型福祉」といった「つかえ棒」で支える必要がでてきました。人間活動を自動車にた

図-3 5つの領域相互の比重関係におこった変化



とえますと、巨大なエンジンを備えた車が制御不能に陥り、道路たる自然を削り取り、ガードレールを破壊しながら、目的地なしに暴走するようになった——それが今日の偽らざる実情だといってもよいでしょう。

長方形型の社会への非暴力的な移行

しかし今日の逆三角形型の社会を200年前の正三角形型の社会に戻すことは望ましくありません。ヒトの総人口が数億人レベルであれば可能かもしれませんが、すでにヒトの人口は65億人に達しているからです。

正三角形型社会に戻さなくても、社会の安定を取り戻す道があります。図の右側のような長方形の姿に変えるといいのです。長方形型の社会であれば、たとえ人口数が80億人になったとしても、自然を損なわないかたちで社会の安定を取り戻すことができそうです。私たちは今、不自然な逆三角形を右側のような長方形の姿に変える課題に直面しているといっても過言ではありません。

経済と政治が吸い上げてきた資源とパワーとを、産みの親たる社会領域や自然領域に戻し、バランスを回復していくには、どうすればよいのでしょうか。図-3の逆三角形モデルのなかの経済・政治の張り出した部分を切り取って、これを下半分のへっこんだ部分に移し替えるとよいのです。そうすると逆三角形は、長方形に変わります（なお長方形社会が安定的に続くと、経済・国家・社会の間の境界線が次第に薄れていく可能性があるため、境界線は点線にして

います)。

この「移し替え」作業を戦争や暴力革命を伴わないかたちで遂行することが不可欠となっていることにも注意してほしいと思います。なぜなら戦争や内乱は、今日の条件のもとでは、原子力発電所の炎上や核戦争をもたらすことが避けられなくなっているからです。そうなるとヒト社会の持続的な発展は、致命的な打撃を受けるでしょう。戦争や暴力革命なしに、この壮大な「移し替え」を行うためには、経済改革が決定的なポイントとなっていることに注目してください。環境税・補助金などの財政のシステム改革を進め、「移し替え」作業を進めても経済的に損をしない、むしろ経済的に得をするというしくみを作りだし、人々の文化と意識を変えていくことが不可欠です。「徳が得になる」という経済システムを作り出し、人々の文化と意識を変えていくことが、非暴力的な社会改造のもっとも大切なポイントとなってきたのです¹⁴⁾。経済を学ぶことがいかに大切かが、お分かりいただけたでしょうか。

聖書には「放蕩息子が羽を打ち枯らして父母のもとに帰る」という説話があります。唐代の詩人陶淵明は「帰りなんいざ 田園まさに蕪れなんとす なんぞ帰らざる」と歌いました。先哲が見抜いたように、「人間のミレニアム」をどのようにして「自然のミレニアム」に転換したらよいのか、生命体のリズムとルールにしたがって、どのような都市をつくり、地域をつくり、経済をつくっていったらよいのか。農村部にどのようにして工業と文化を呼び戻し、農業を「第6次産業」（製造業とサービス産業との複合体）として復活させたらよいのか。このような社会変革を非暴力的な手法、とくに経済的刺激的力を用いて行うにはどうしたらよいのか、21世紀最大の課題となってきたのです。

「幸福」とは何か、どう測ったらよいのか

ヒトの生活を経済、政治、社会、文化、自然の5つの領域の組み合わせという視点から統合的に捉えるという立場にたつと、一人当たりの国内総生産(GDP)の大きさだけによって、幸福の大きさを測定することは一面的だということもわかってきます。

ヒマラヤ山中にブータン王国という仏教国があります。最近私も調査にいったのですが、ブータン人の一人当たり GDP は日本の40分の1程度です。しかし年寄りや子供たち、犬や牛などがじつに幸せそうでした。日本では毎年、3万人を超える人が自殺に追い込まれていますが、この国では自殺する人はほとんどいません。

先代のブータン国王が言い出した言葉に「国民総幸福」(Gross National Happiness)があります。「国民総幸福」とは何か。これをどのように測ったらよいのでしょうか。¹⁵⁾ブータンの人々の見解をすこし脚色して要約しますと、つぎのようになります。ヒトの幸福感を決めるファクターには、経済学者が強調する①マネーで購入できるモノ(物財)の豊かさのほかに、少なくともつぎの8つがあります。すなわち②マネーでは購入できないモノ(道路や学校施設などの社会的共有財=インフラストラクチュアや手作りの自給財)の豊かさ、③コト(人間関係)の豊かさ、④文化的(生き方に迷いが無い)豊かさ、⑤シゴト(働きがい)の豊かさ、⑥自治(民族自決と政治的民主主義)の豊かさ、⑦自然の中のイノチの豊かさ、⑧自由な時間の豊かさ、⑨それらの総結果としてのヒトの全人的発達(16)の豊かさです。これら9つのファクターの総合計によって、幸福感が定まるというのです。

モノの豊かさについても、単純に市場に流通する商品の購入額で決まるわけではありません。家庭菜園で新鮮な野菜を家族ぐるみで作ること、こどもの玩具や恋人の衣服を丹精こめて作り、繕うこと、子育てのケアや教育については安易に市場にアウトソーシングしないこと——社会の友愛圏でなされるこれらのシゴトがいかに大切であるかは、米国北東部の自宅を美しい庭に変えた絵本作家ターシャ・チューダーさんの生き方が示しています。¹⁶⁾日本では青森の岩木山麓で「いのちの森の台所」(森のイスキア)を運営し、迷い、疲れ、救いを求めて訪れる人に手作りの食事を供し、寄り添うことで再生のきっかけを与えている佐藤初女さんの実践も教訓的でしょう。¹⁷⁾生きるとはイノチの移し替えのことだからです。そのうえで生存に不可欠な財(水・衣食住・教育・医療)が全員に保障されていること、富の分配が公正で行われていることが、幸せ感をアップ

させるポイントとなります。

足るを知る長方形型の社会の利点

お釈迦さんが述べられたように、モノの豊かさ感というのは、物財／欲望で決まります。それゆえ物財の所有量を大きくするのではなく、欲望量を少なくするという方法を使って、豊かさ感を高める手もあるのです。じっさい今日の過剰消費社会では、「足るを知る」という角度からアプローチすることのほうが大切だと多くの人が説くようになってきました。なぜなら地球温暖化を防ぐためには、二酸化炭素の排出量を大幅に削減しなくてはならないからです。「世界には全ての人々を満たすだけの富がありますが、強欲な人々を満たすことはできません。自然には限界がありますが、強欲には限界がないからです」とマハトマ・ガンジーが説いたとおりです。さらに言うと、過剰な飲食こそがメタボリック症候群を生み出し、健康を破壊する元凶となってきたからでもあります。「腹八分目医者いらず」という養生訓があるように、ダイエットに努め、「知足」の道を歩んだほうが健康増進のために効果がある時代となりました。

逆三角形の社会を長方形型の社会に移行させたほうが、国民総幸福指数を高めやすいことを図-3を用いて、例解してみましよう。逆三角形社会で、経済領域のモノの豊かさ量が仮に20だったとします。経済部門の重みで他の諸部門の質が劣化することは避けられません（経済学用語では、市場活動がひきおこす非市場部門の劣化のことを「コストの外部化」といいます）。そのため政治部門の豊かさは5に低下、文化部門は3、社会部門は2、自然部門は0に低下したとします。このばあい、5部門をあわせた総幸福量は30に留まります。それにたいして未来の長方形社会では、モノの豊かさはGDP換算で半分以下に低下し、10となったとします。しかし他の部門の質的劣化が起これないとするれば、政治・文化・社会・自然部門の豊かさは各10のレベルをキープできるでしょう。そうすると合計の総幸福量は50となり、逆三角形社会の幸福量30を大きく上回ることになるのです。長方形型の「平和なエコ・エコノミー社会」への移行が、人の心身を健康にするだけでなく、平和な人間関係を作り出し、豊かで健康な自然

を取り戻し、幸福感を増大させる道となるでしょう。このことが知れ渡っていけば、新型社会への移行を後押しする有力な援軍となるでしょう。

資本主義国のタイプの違いの理由

ヒトの生活を経済、政治、社会、文化、自然の5つの領域の組み合わせという視点から統合的に捉えるという立場にたつと、同じ資本主義国であっても、国情に応じてかなりの多様性があることの根拠を知ることが容易となります。

たとえば、アメリカ型の資本主義のばあい、経済(市場)領域がもっとも強い影響力をもっています。閣僚たちは、経済界の代表が任命されることが多いですし、政治の世界にも市場の論理が貫きがちとなります。また社会(ヒトづくり)も経済の論理で左右されることが多くなります。

他方、日本や東アジア諸国のような「開発独裁」タイプの資本主義のばあい、国家と官僚機構が主導的な役割を果たしてきました。国家が強力な窓口指導と産業政策をとおして、経済領域を指揮し、支援することが多くなりますし、検定教科書などをとおして、ヒトづくりの領域にも影響力をふるいます。

これにたいして、北欧型の資本主義のばあい、社会・文化領域が相当に自律的な活動を展開し、他の領域のありかたに大きな影響力を発揮しているのが特徴です。北欧型の社会では、「社会・文化」部門が発展し、NPO・NGOの旺盛な活動を生み出し、国家権力と企業権力の暴走を、監視し、抑制する力を育んできたのです。この地域では、同じ資本主義国でありながら、民主主義がかなりの程度、根付いています。国政選挙の投票率は、米国のばあいは3割から4割台ですが、北欧諸国のばあいは、7割から8割に達することが普通です。

人間社会のありかたは、その社会が大地・自然とどのような関係を取り結んでいるかによっても大きく左右されるでしょう。封建制度の解体過程で、どれほど徹底した土地革命が行われ、土地資産の民主的な再配分が行われたか。その結果、大地のなかに、どれほど大量の微生物とミミズが生息し、健康な動植物を育み、健康な心身をもつ住民を生み出しているのか。都市住民も、どの程度、家庭菜園を保有し、大地・自然との有機的な関係を保った生活を送ってい

るか——これらの指標いかんで、社会関係の質（住民の健康度、社会関係の平和度）は大きな影響をうけるからです。北欧社会や米国の北東部、それに東アジア諸国では、封建的な大土地所有制度が解体され、大地との健康な関係を維持する自作農民や中産階級が多数生まれました。このような母体から生み出される資本主義国の文化や政治民主主義の発展の水準には、大地主制度や奴隷制度を母体にして資本主義化が進んだ諸国とは無視できない違いがあります。

日本の「構造改革」とは何であったか

戦後の日本で「構造改革」の必要が議論された時代が2度あります。1度目は1960年代で、社会民主主義勢力の影響下で、アジア型の日本資本主義をどう北欧型に改革したらよいかの問題になりました。2度目が、21世紀の小泉政権の時代で、日本資本主義をどうアメリカ型に改革すべきかが議論されたのです。このように同じ「構造改革」という言葉を使っている、到達先が違っていたことは、図-2の視角にたって観察すれば、一目瞭然です。しかしモノづくりと配分という純経済的現象だけに視野を限っていると、このような各国社会の多様性が見えてきませんし、資本主義を変貌・修正させてきた力も捉えにくくなります。

1930年代の世界恐慌と第二次大戦の破局から資本主義を救うために、古典的な資本主義は、「修正資本主義」の方向に大きく変貌をとげますが、そのような変貌をもたらしたしくみを探りあてようとしたばあい、経済の枠内を探しまわっても無駄です。上からは国家・政治の力、下からの市民社会の力が、資本主義という経済制度の変貌を作り出したからです。したがって経済学を学ぶばあい、まずは人間活動の全体システムに注目してください。「自然」（イノチづくり）、「社会」（ヒトづくり）、「政治」（コトづくり）、「文化」（生き方づくり）などを統合したシステム論的視点から「経済」（モノづくりと分配）にアプローチすることがいかに大切かを知ってほしいと思います。

4. エコ・エコノミーを創ろう

「人が最後の木を切ってしまった時
 人が最後の川を汚してしまった時
 人が最後の魚を食べてしまった時
 その時！ 人は気づくだろう。お金は食べられないということを」
 (ナマケモノ倶楽部の地域通貨「ナマケ」の標語から)
 「……変えることのできるものを変える勇気と、
 変えることのできないものを受け容れる心の優しさと、
 いずれであるかを見分けることのできる叡智を
 私に与えてください」
 (ラインホルド・ニーバー『平安の祈り』から)¹⁸⁾

ヒトは、なぜ真善美を求めるのか

「文化」というのは、「真善美」原理の支配する世界だと述べてきましたが、なぜ、ヒトは真善美の価値を求めてやまないのでしょうか。

宇宙における事物自体が、水素とヘリウムだけの単調で平板な姿から、より多様で共生的で美しい方向へと進化してきたからではないかと、私は考えています。地球も当初の平板な姿から、多様な樹木が生い茂る深い峡谷を形成し、美しいリアス式の海岸を生み出しました。とくに日本のばあい、列島を形成する地層が複雑なために、日本の山はどれも個性的で、植物相はじつに多様です¹⁹⁾。ヒトの手が適切に入ったばあい、自然と人間が調和し共生できる、美しい里山を作り出せることも分かってきました。ヒトたちの織りなす社会関係も、大局的には、相互に配慮しあえる平和で健康な関係に進化してきたように思います。

宇宙の事物じたいが、「自己組織化のパワー」に導かれて、より多様で共生的で美しい姿に進化（自己創発）してきたのが真実の姿であるがゆえに、進化の道をさらに前に向けようとする「宇宙的本能」に駆り立てられて、ヒトは真善美を求めてきたのではないのでしょうか。

もとより、ここ数百年から数千年のスパンで考えたばあい、野蛮な戦争が起

こり、公正な関係が破壊されたことがありました。美しい自然が汚染され、森林が砂漠に戻り、動植物の多様性が損なわれたこともありました。とはいえ自然と社会とが多様多彩で美しい姿に進化するというのが、宇宙進化の大道であるとすれば、このような破壊的動きは進化の表層に現れた一時的逆流にすぎません。

これまでヒトがおこなった最大の核爆発は、1961年10月にソ連がおこなった水爆実験で、広島型原爆の3千5百倍の50メガトンの威力がありました。宇宙空間で数万メガトン級の核戦争が行われたら、地球に破壊的影響がもたらされ、人類は絶滅に近い状況に追い込まれることは必定だといわねばなりません。しかし一定の条件があれば、そのような自殺状態に追い込まれる前に、ヒトは正気を取り戻すだろうと私は楽観しています。その条件とは何でしょうか。「正気の文化」（エーリッヒ・フロム）をとりもどせる方向に経済システムを修正し、経済と国家のパワーをその方向に手なずけることだと私は考えています。

「正気の文化」が生き返ってくるにしたがい、存在と価値、客体と主体という二分法が克服され、真善美という価値の再融合が進み、学問と芸術・宗教を隔ててきた壁が低くなっていくでしよう²⁰⁾。

エコロジーのなかにエコノミーをうめもどす

もともとエコロジーとエコノミーというのは同一のラテン語、オイコス（oikos）から生まれた言葉。オイコスというのは人の棲家（すみか）という意味です。インド生まれの哲人サティシュ・クマールさんが述べているように、この棲家の性質についての認識をエコロジーといい、その棲家を管理する営みのことをエコノミーと呼んだのです。土でできているのか、木でできているのかといった家の性質を理解せずには、家の適切な管理は、できない相談です。エコロジー的な認識を土台にしないとエコノミーの管理は不可能なわけで、一流のエコロジストでなければエコノミストの仕事は務まらないはず。しかるに現代世界のエコノミストたちの大多数は、エコロジーの認識が欠けたまま、棲家の管理に携わっています。ここに現代の不幸の一因があります。

結論を申せば、21世紀が「環境＝イノチの世紀」にならないかぎり、人類の未来はありません。私たちは、じつは「万物の霊長」ではなく「万物の癌細胞」にすぎなかったことが露見して、滅んでいくだけでしょう。環境というのは、36億年も続いてきた地球のなかのイノチの流れのことであり、「生きる」とはイノチの移し替えのことに他なりません。そのような環境＝イノチのシステム内部の片隅にヒト社会が生まれ、そのまた一隅に経済システムが生まれてきたことを、まずしっかりと自覚してください。そのうえで、今日の経済を「エコ・エコノミー」（自然体の経済）の方へ作り変える課題にとりくんでほしいと思います。

現下の不況を克服しつつ、この方向に経済を向けていくために、「グリーン・ニューディール」の推進が叫ばれています。グリーン・ニューディールを本格的に実践するには、ブラック・ブルー・ピンクの三色のニューディールを推進することが必要ではないかということを、私は提言しています。ブラック（炭素のままで土壌に埋め戻し、土壌の炭素と微生物の含有率を高め、肥沃な黒土をつくる）ニューディール、ブルー（二酸化炭素を海に吸収し、海藻・サンゴ礁を養い、海底に石灰岩を埋め戻していく）ニューディール、ピンク（人のお世話とケア・医療、²¹⁾教育を重視する）ニューディールをめざすことが大切です。その戦略的な目的にむかって世界資源を動員する「総動員経済」の構築こそが求められているのではないかと私は考えています。²²⁾

大地と宇宙に根をはり、自らを恃（たの）む生き方を

まさに皆さん方の学び方いかん、学びに導かれる実践いかんに地球の将来がかかっていると言ってもよいと思います。「平和なエコ・エコノミー」の創造めざして、皆さん方の自発的（ボランタリー）な学びと実践活動を期待するしだいです。

もともと「ボランティア」とはどんな人のことなのでしょうか。「言われなくてもする人」というだけでは不十分。「言われてもしない不服従の人」。M. K. ガンジーが実践したように「マイライフ イズ マイメッセージ」といえ

る人生を送ろうと決意した人のことではないでしょうか。

最後に、このようなボランティアとして生きる喜びを歌った二つの詩を皆さんに贈りましょう。「私は眠り、人生は喜びだという夢をみた。私は目覚め、人生とは奉仕だと知った。私は行動し、目をこらす。奉仕は喜びだった」（ラビンドラナート・タゴール）。

アッシジの聖フランチェスコも、次のように歌っています。「……慰められるよりは慰めることを、理解されるよりは理解することを、愛されるよりは愛することを、わたしが求めますように。わたしたちは、与えるから受け、ゆるすからゆるされ、自分を捨てて死に、永遠の命をいただくのですから」と。

「私が生まれたとき、私は泣き、皆が笑った。私が死ぬとき、私は微笑み、皆が泣くでしょう」——こんな一生を送れたら素敵だと思いませんか。

注

- 1) シュミット・ブレイク『ファクター10』1997年、シュプリングー東京。
- 2) デービッド・コーテン『グローバリズムという怪物』1997年、シュプリングー東京。
- 3) スチュアート・カウフマン（米沢富美子監訳）『自己組織化と進化の論理』1999年、日本経済新聞社、16-17, 24, 35ページ。
- 4) 佐治晴夫『宇宙の風に聴くー君たちは、星のかけらだよ』1994年、かたつむり社。
- 5) ウイリアム・クラーク『死はなぜ進化したか』97年、三田出版会。
- 6) デヴィッド・スズキ（辻信一訳）『いのちの中にある地球』2010年、NHK出版、38ページ。
- 7) 「36億年の歴史を持つDNAの発する強い力と、ただか数万年の歴史しか持たない自我との間の葛藤に苦しんでいるのが人間です」（柳澤桂子『意識の進化とDNA』地涌社、1991年、6ページ）。
- 8) 高木善之『地球大予測』1998年、サンマーク出版、140-141ページ。
- 9) 諸富祥彦『生きていくことの意味』2001年、PHP新書、53-65頁。同『どんな時も人生にYESを言う』1999年、大和出版、124-131頁。
- 10) 内山 節『市場経済を組み替える』1999年、農文協、211ページより。
- 11) 帯刀益夫『われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこへ行くのか』2010年、早川書房、44-56ページ。
- 12) マット・リドレー（大田直子ほか訳）『繁栄ー明日を切り拓くための人類10万年

- 史』, 2010年, 早川書房, 18-19頁, 第2章。
- 13) カール・マルクス『経済学批判への序言・序説』1859年, 14-15ページ。
 - 14) サティシュ・クマール (尾関 修ほか訳)『君あり, 故に我あり—依存の宣言』2005年, 講談社学術文庫, 『つながりを取りもどす時代へ』(枝廣淳子監訳) 2009年, 大月書店。
 - 15) 辻 信一編著『GNH もうひとつの豊かさへ, 10人の提案』2008年, 大月書店。
 - 16) ターシャ・チューダー『楽しみは創り出せるものよ』2003年, メディアファクトリ。
 - 17) たとえば佐藤初女『いのちの森の台所』2010年, 集英社。
 - 18) 鈴木有郷『ラインホルド・ニーバーとアメリカ』1998年, 新教出版社, 139ページ。
 - 19) 小泉武栄『日本の山と高山植物』2009年, 平凡社。
 - 20) J.D. バロー『宇宙のたくらみ』2003年, みすず書房, 328, 335ページ。
 - 21) リーアン・アイスナー『ゼロから考える経済学』2009, 英治出版。
 - 22) この点を明らかにした本に, レスター・ブラウン『プラン B 4.0』2010年, ワールドウオッチ・ジャパンがあります。私も, そのための経済改革構想を発表しています。藤岡 惇「持続可能な日本づくりのアジェンダの提案」森岡孝二ほか編『二一世紀の経済社会システムを構想する』2001年, 桜井書店, 参照。

補説

ミミズと地球と経済学

「……生きている人だけの世の中じゃないよ。生きている人の中に死んだ人もいっしょに生きているから、人間はやさしい気持ちをもつことができるのよ。ふうちゃん。」

（灰谷健次郎『太陽の子』）

2007年のノーベル平和賞は、地球温暖化問題に警鐘を鳴らしたアル・ゴアさんたちに与えられた。06年度はグラミン銀行を創設したモハメド・ユヌスさん、04年にはケニアの農村女性とともに植林作業に取り組んだワンガリ・マターイさんが受賞された。崩れぬ平和を築いていくには、軍事や外交だけを重視しても限界がある、もっと深部に注目し、平和の経済的ないしエコロジー的基盤を築く営みを重視すべきだというメッセージを選考委員会は送ろうとしたのだろう。

森を造ると雲が浮かび、土壌を肥やすと平和が築ける

第一次大戦前夜にキリスト者の内村鑑三が、『デンマルク国の話』（岩波文庫）という本のなかで紹介した「もみの木の植林」の話をご存知だろうか。

1864年にプロシアとの戦争に敗北したことを契機に、デンマーク国民は覇権戦争に走ることの愚を悟り、「外に広がるのではなく、内を開拓しよう」という道を選び、ユーラン半島北部の不毛の地に植林しようとした。大変な労苦のすえ100万エイカの荒地は豊かな森林に変わっていった。荒地や砂漠のばあい、たまに雨が降っても水分はすぐに地域外に流出していく。これにたいして森林のばあい、雨水は葉っぱや下草に長く留まるので、森の上にぽっかりと雲が浮かぶ。そうすると雨がよく降るようになるので、気候は温和となり、土壌が肥沃になる。その結果、デンマークは屈指の豊かな酪農国に変貌したのだと内村

は説き、満州に進出しようとしていた当時の日本の帝国主義的な風潮に警告を發したのだ。

肥沃な土壤のばあい、一つまみの土のなかに60億を超える微生物が生息している。わずか1グラムほどの土壤のなかに、人類の総数に等しい数の微生物が織りなす世界が展開しているのだ。土壤のなかの微生物を栄養源にして大小多様なミミズが生息するようになると、大量の糞を生み出し、土壤を肥やしてくれる。かつてチャールズ・ダーウィンは、ミミズを「地球の偉大な大腸」と形容したことがあるが、ミミズが大量にいるところでは畑を耕す必要さえ減るといふ。ミミズが無数のトンネルを掘り、土を団粒化し、土壤をふっくらとさせてくれるからだ。

健康な微生物が分解した化合物を栄養源とすることで植物が健康となる。この植物を栄養源にすることで健康な動物が生まれ、これら動植物の「いのちをいただく」ことで、心身ともに健康な人間が育まれる。また人間の生存のために不可欠な「人権財」（たとえば水・食物・エネルギー）だけでも自給できるようになると、生存への不安感は減り、国際関係はもっと穏やかで、協調的なものとなるに相違ない。したがって土壤のなかで大量のミミズが幸せに暮らしている国ほど、住民の健康度、社会関係の平和度が高くなっていくのは当然だ。

地球温暖化を防止するために必要なこと

地球圏のなかで炭素はどこに分布しているのだろうか。海洋の炭素固定化作用（二酸化炭素を石灰岩に変える作用）をひとまず措くとすると、いま世界では、¹⁾ 固体の炭素が毎年72億トンほど燃やされ、二酸化炭素に姿を変えて大気中に排出されている。

その結果、第1に炭素は7500億トンの二酸化炭素という姿をとって大気中に存在するようになり、大気熱の地球外への放散を妨げ、大気圏の温暖化をもたらしてきた。第2に、炭素は化石燃料（石炭・石油・天然ガス）という姿をとって、地中のなかに4兆トン存在している。第3に、5500億トンの炭素が、地上（一部は海中）の植物（樹木や野菜、海藻）という姿をとって固定化されている。

第4に、土壤有機物という姿をとって1.5兆トンの炭素が土壤のなかに留まっている。なお注釈を加えると、土壤とは、微生物が大量に生育している地層をいい、地球の表層をごく薄くおおっているにすぎない。地表から1メートル以上の深さに達するケースはごく稀だという。

地上の植物群が蓄える炭素の3倍という膨大な炭素が土壤内に存在しているのだ。土壤のなかで炭素の一部は酸素と化合して二酸化炭素、泥土のなかの発酵を介してメタンガスとなっているが、地中に閉じ込められている限り、温暖化を促進することはない。地上の植物のばあいは、平均すると10年後に炭素は二酸化炭素となって放出されるが、炭素が土壤の中に入りこむと、地上よりもはるかに安定的となり、平均すると50年は地中に留まるとい²⁾う。

炭素を大地に戻すための計画

豊かな土壤をつくるにはどうしたらよいのだろうか。まずは落ち葉・稲わら・生ゴミ・糞尿の堆肥化を進め、土に戻す。その上で荒地や遊休地に木を植えていく。住宅を建てるばあいは、材木の地産地消を奨励し、近隣の成木を伐採し、百年は住める良質な住宅をつくるという運動を展開したいと思う。木造住宅・ログハウスからなる街を造ることは、炭素の固定化という観点からみると大規模な造林事業を行っているのと同じこと。樹齢百年めざす「都市の森」創生計画だと言い換えてもまちがいではない。

百年後に家を取り壊したとしよう。その際に大量の廃材が出てくるだろう。廃材は炭にし、細く砕いたうえで、土壤のなかに埋めもどしていこうというのが私の提案だ。炭化しておくことで酸化されにくくなるので、炭素の土壤中の滞留期間は50年より長くなるだろう。炭の表面には無数の穴が開いているので、微生物の格好の棲み家となり、土壤も肥えていこう。多様な炭素化合物＝腐植土を豊富に含む土は黒くなる。この作業をとおして、日本の大地を肥沃な黒土地帯に変えていきたいものだ。

私は、もう一つの構想も温めている。廃材などを土壤圏より深い地層にうめこみ貯蔵していこうという計画である。数百年たつと泥炭になるだろう。数万

年たつと立派な炭田，数百万年たつと立派な油田が復活してくるかもしれない。エネルギー不足に見舞われたときには掘り出して使うことができるので、「エネルギーの安全保障」にも役立つだろう。

炭鉱の坑道跡や油田の底に二酸化炭素をポンプで送りこみ，長期間封じ込めようという計画が進められているやに聞く。この種の計画のばあい，実現するには莫大なコストがかかるだけでなく，周辺の生態系に悪影響を及ぼす危険があるし，土壌を肥やす役割もはたさない。このような高価で危険な計画よりも，堆肥づくりを進めたり，廃材を土壌に戻していくほうが優れており，夢があるように思うのだが，いかがであろうか。すでに日本の関西電力は，インドネシアの現地植林会社と協同して，廃材を炭化して，できた炭を土壤改良剤として土地に戻す計画をもっているという³⁾。

動物が幸せになると人間も幸せとなり，経済も繁栄する

動物が野生のなかで本来の幸せを実現しているシーンを見るとき，人間も幸せな気分になっていくものだ。その証拠が北海道旭川市立の旭山動物園の事例であり，兵庫県豊岡のコウノトリの郷文化公園ではないだろうか。渡り鳥のコウノトリが再び飛来してくれるよう，有機農業に徹し，農薬を使わない農村づくりをしよう⁴⁾と豊岡盆地の農民たちは決意した。コウノトリが幸せになる地域づくりに励むことで，人間も幸せになれる。そうすると観光客の心の琴線に触れるので，経済的にもペイするという好循環が，豊岡の地に生まれ始めたように思われる⁴⁾。

むかし「労農同盟」（労働者と農民の同盟）という言葉があった。21世紀という時代は，この「労農同盟」という言葉の皮袋に新しい内容を盛り込む時代になるのではないだろうか。「生き物と死に物」「農村と都市」の同盟を介して，自然体の体をとりともし，心身をエコロジーと文化のなかに埋め込んでいき，大地と宇宙に根を下ろしていく生き方を実践する時代になるであろう⁵⁾。

漫談家の綾小路きみまろさんは，富士山麓で始めた家庭菜園づくりの体験について，つぎのように語っている。「東京では，人の顔色をみながら，『どうや

って生きようか』ってなるけど、田舎では、ミミズの顔をみて、『おれは生かされているんだ』、『どうやって死のうかな』って考えられる⁶⁾と。「都会の銀行に預金がある安心感とは質の違う、大地に生かされているという根源的な安心感」（きくち・ゆみ）を培っていけるタイプの経済学、「自然を崇敬する唯物論」の立場にたった経済学こそが求められているのであろう。

自然・イノチを崇敬する唯物論の大切さ

2050年までに二酸化炭素の排出量の半減を実現するためのもっとも実り豊かな方策の一つは、炭素を土壌のなかに固定化していくことだと述べてきた。日本の土壌のなかの炭素含有比率を大幅に引き上げていく「国土の黒土化」年次計画を策定することがまず必要だろう。そのための国民的キャンペーンを先導し、持続可能で平和な社会経済を築いていくためには、どのような質の哲学と経済学が必要なのであろうか。

自然・宇宙の壮大な進化発展の姿をつかめず、生き物と死に物との区別さえつかない「機械的唯物論」では、到底その任には耐えられないであろう。

他方、近代の経済学は、人間をエコロジ的な土台や社会・歴史の枠組みから切り離し、類（人類・生物）と累（祖先と子孫）から孤立した「近代個人モデル」という枠組みのなかで捉えようとした。そのため大地・自然が人間を生み出し、「いのち」（身体）が精神（脳・自我）を生み出し、「イノチ」が「私」を生きているにもかかわらず、あたかも人間のほうが大地・自然を所有・支配し、精神（脳・自我）のほうが「イノチ」（身体）を所有・支配しているかのように考えてきた。

また人間（自己）とは、「正しいから行動する」という倫理的動機と「得するから行動する」という経済的動機の二本柱で行動するものであり、そのばあいの「自己」の範囲も、人間的発達のレベルに応じて、大きくも小さくもなる。人間的発達のレベルが高くなると、「自己」の範囲は、「孤独な脳」から身体、家族、一族郎党、地域社会、民族、国民、人類、生物界、地球といったレベルに拡張し、「自我」は「小我」から「大我」へと発展していくものだ。しかる

に近代の経済学は、自我の発展を「小我」というレベルに固定し、「自分だけ、今だけ、お金だけ」というレベルで行動する「経済人モデル」が実際に成立するかのように仮定して、経済理論を組み立ててしまった。

自分の脳を主軸として世界は回っているかのように考えるこのような天動説的な観念論と経済への還元主義という二重の誤りを克服していくことが、持続可能な経済社会を築いていくために不可欠だと、私は考える。言い換えると私（自我・脳）がイノチをもっているという観念論的観点から、イノチ（客観的な自然史のなかのイノチの流れ）が私として存在している（イノチが私を生きている）という唯物論的観点に転換することが必要な⁷⁾のだ。

弁証法的唯物論を「自然・イノチを崇敬する唯物論」に鍛え上げ、そのような宇宙観・人間観に立脚した経済学を構築していきたいものである。

注

- 1) 毎年大気圏に排出される72億トンの二酸化炭素のうち約20億トンは海洋に吸収され、海洋中のカルシウムと化合して炭酸カルシウムとなり、海底の石灰岩に姿を変えて蓄積されているという。竹村真一『Water 水』2007年、ワールド・フォットプレス、78ページを参照。
- 2) 詳細は、木村真人ほか編『土壌圏と地球温暖化』2005年、名古屋大学出版会を参照
- 3) 『朝日新聞』2002年9月13日付け。なお炭素循環農法・実践図書館のホームページも参照。
- 4) 菊池直樹『蘇るコウノトリ—野生復帰から地域再生へ』、2007年、東京大学出版会を参照。
- 5) この点の大胆な提起は、小貫雅男・伊藤恵子『森と海を結ぶ菜園家族』2004年、人文書院。
- 6) 『朝日新聞』2007年5月20日付け。
- 7) サティッシュ・クマール（尾関 修ほか訳）『君あり、故に我あり—依存の宣言』2006年、講談社学術文庫